



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 28 主日 B 年 (2024 年 10 月 13 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 7 章 7—11 節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 4 章 12—13 節

福音朗読：マルコによる福音書 10 章 17—30 節

本当の富

第一朗読『知恵の書』7 章—9 章は、ソロモン王が語るという形式で書き記されています。ソロモン王は知恵ある者でした。「イスラエルの人々はみな王が下したこの裁きを聞いて、王を畏れ敬った。正しい裁きを行うために、神の知恵が王のうちにあることを知ったからである」(列上 3 章 28 節)と『列王記上』にあります。ソロモン王は自分の長寿も求めず、富も求めず、敵のいのちも求めず、「正しい裁きを行う判断力」、すなわち、知恵を求めました(3 章 11 節)。紀元前一世紀に著された『知恵の書』は知恵の特性を語るところで、ソロモン王に語り手を託したのでしょう。

11 節に注目してください。知恵は善を伴います。知恵がもたらす「量り難い富」は、物質とは比較にならないものです。『知恵の書』が成立した時代は、ヘレニズム文化の最盛期です。ヘレニズム文化は、ギリシア人が東方に移住したことで、東方の文化と融合して生まれた新しい文化です。「ミロのヴィーナス」や「ラオコーン」などの美術品が生まれた時代です。それまで、ポリス(都市国家)での生活で、ポリスの人間としての生き方を求めていたギリシア人は、新しい文化と出会うことで、新しい生き方を模索しました。その結果、一方で「個人的にどう生きればよいのか」という個人主義が尊ばれながらも、他方でヘレネス(ギリシア人)もバルバロイ(ギリシア人以外の野蛮人)も区別がなく、同じ世界の人間だという世界市民主義(コスモポリタニズム)の風潮も強くありました。哲学でも、禁欲主義を説くストア派と快楽主義を説くエピクレス派と両極端の思想が生まれました。

『知恵の書』はヘレニズムの文化が含んでいる物質万能主義に対抗していこうという意識が

あったのかもしれませんが。それで神から来る知恵の価値に焦点をあてたのでしょう。

福音朗読では 21 節に注目してください。「慈しんで」はフランシスコ会訳では「愛情をこめて」となっています。エーガペーセン（アガパオー）は「愛した」という意味です。ですから、イエスさまがこの男に向かって、馬鹿にしたようなまなざしを送ったのではないことが想像されます。むしろ、彼を助け、救いに導き入れようとしたのではないのでしょうか。それで、欠けている「一つ」のことを伝えます。それは、貧しい人に所有物を売って貧しい人に施し、その後でイエスさまに随従することです。施しをするのは宗教的、道徳的な徳に優れた行為でしょう。しかし、それをすべて売り払い、無一文で行われるためには、自分のあり方を天（神）に求め、神中心に生きようとしなければならないのです。

22 節で財産と訳されている言葉はクターマタですが、複数の土地という意味もありますから、この男が大地主だった可能性は否定できません。福音書の中でイエスに随従することを拒否したのはこの人だけです。信仰にとって富の危険性を警鐘しているかのようです。

24 節の「驚いた」はエタムブントですが、驚愕した、衝撃を受けたという意味です。ここで注意したいのは、神の国に入るのが難しいのは金持ちではなく、すべての人、とりわけ「子たちよ」と呼びかけられている弟子たち自身です。

25 節のたとえば、不可能を表すユーモラスな表現です。続く 26 節の「だれが救われるのだろう」という弟子たちの反応は至極当然のように思えます。なぜなら、当時のユダヤ人にとって財産は神の祝福のしるしだったからです。しかし、イエスさまは、財産があれば、自分の財産を頼りにして、神に信頼する生き方を見失うことを教えます。

ですが 28 節で、救いは神のわざであることがイエスさまから教えられたばかりなのに、ペトロは立ち去っていった金持ちの男と比較して、自分たちがしてきた所有の放棄とイエスへの随従を誇らしげに言います。「このとおり」は、直訳すると「ごらんください」の意味。「わたしたち」（ヘーメイス）と自分たちを強調します。

なんともラチのあかない弟子たちです。

お知らせ

10月27日はロザリオ祭です。

10時半からアントニオ会館の庭でミサとなります。

ミサ後、軽食をいただきながら懇談しましょう。